比叡山時報

発行所
比叡山時報社
jihoh@deluxe.ocn.ne.jp
大津市坂本本町4220
郵便番号 520－0116
電話　077－578－0001
振替　00970 －2－ 9732
宗教法人延暦寺事務所
定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報
叡山講福聚教会
会　報
年度会費（3000円）中に会報（比叡山時報）購読料を含む。

賀正

国宝　最澄像　聖徳太子及び天台高僧像　十幅のうち（兵庫・一乗寺蔵）

令和３年辛丑（かのとうし）明けましておめでとうございます

昨年は、新型コロナ感染症の世界的な拡大により私たちの日常生活に大きな変化が余儀なくされました。多くの人たちが、仕事、収入、健康、人間関係などに影響を受け不安を懐いています。マスクをすることももう既に常識的なエチケットとして定着しつつありますが、マスクの下の顔に皆な不安が隠れています。感染症の終息の道筋はまだ見えていません。しかし人間の歴史は必ずこれを克服してきました。私たち一人ひとりがその終息を信じ、冷静に判断し自分の行動を正すことにより、少しでもその日が早く来ることを願っています。

令和３年は宗祖伝教大師の一千二百年の大遠忌祥当の年に当たります。比叡山は多くの祖師先徳を輩出し、それぞれの祖師の50年ごとの遠忌にはその業績を学び、法要を勤め、恩に報いることに努めてきました。近年では慈覚大師の一千百五十年御遠忌、恵心僧都の一千年御遠忌、相応和尚一千百年御遠忌がこの10年間の祖師先徳鑽仰大法会の期間に勤められました。宗祖である伝教大師最澄様については、御生誕、出家12歳、得度14歳、比叡山開創22歳、天台宗開宗40歳と、ご生涯をたどりその時その時の大師の思いや事績を学び自分自身を鼓舞する機会とします。それぞれ文字通り一期一会の勝縁です。

50年前の昭和46年（１９７１）一千百五十年大遠忌は大阪万博の翌年、経済成長期の時代で、天台宗、延暦寺にとって、現在まで続く多くの行事や営みが同じく50年、50回を迎えて執行されているように、今日までの50年間を方向付けた大遠忌でありました。

１００年前の大正10年の大遠忌では、伝教大師の事績が学校の教科書に載るように働きかけられたこと、延暦寺御修法が復興されその開闢の日、４月４日に宮沢賢治が25歳で父親と根本中堂に参拝し、和歌を残していること、またこの年の３月には大遠忌の法要に間に合わせて麓の坂本まで鉄道が開通し、全国から団体で本山参拝が可能となった時でもありました。

さて本年、１２００年の大遠忌は、１２５０年へ向けてどのような遠忌として伝えられるのでしょうか。我々は日頃の社会生活や家庭生活で50年の後先を考えることはあまりないことかも知れませんが、私たちの営みは過去から現在そして未来へと確実に繋がっています。そして現在をまさに紡いでいるのは今の私たちです。過去の遠い昔の祖師方ですが、私たちは同じ祖師を頂いて、生命のつながり、与えられた使命を感じることができます。

コロナ感染症は、現在の私たちにとって未曾有の不安と心配をもたらしています。しかし１２００年の歴史を考えても、先人の労苦の中にはもっと厳しい困難があったに違いありません。たとえ身体的間隔は直ぐに戻らなくても、互いに心の距離は縮めてマスクの下の不安が見えない振りをしないで、皆で支え合い乗り越えていく、そんな一年にしたいものです。

ご購読はこちらから

皆で支え合い乗り越えよう

仏道とは自らの身をもって歩む道

「御遺誡」は本来のお釈迦様の教え

人は恩恵と引き換えに何かを犠牲にしている

今から1200年の昔、宗祖伝教大師最澄様はご臨終にあたり集まった弟子たちに対し数々のお言葉を遺されました。そのお言葉は弟子たちによって書き留められ、「御遺誡」という名の「宗祖の御心」として、多くの先徳方の懸命の努力を以って今の世へと守り伝えられてきました。

今特集では、新年を祝うと共に、いよいよ宗祖伝教大師一千二百年大遠忌の御祥当を迎えるにあたり。一昨年、昨年に引き続き、比叡山をこよなく愛し、天台の教えにも詳しい歌舞伎役者市川猿之助氏に「御遺誡」をテーマにご寄稿いただきました。

「御遺誡」に想いを馳せる

昨年より続くコロナ禍の中、それぞれが、それぞれの想い、お立場で新しい年を迎えられると存じます。未だ予断を許さない厳しい状況ではございますが、世界規模で広がる疫病の一刻も早い収束を願うとともに、本年が皆様にとりまして、少しでも安らぎに満ちた日々となりますよう、そして、大難が小難に、小難が無難となり、大過なく過ごされますよう、心よりお祈り申し上げる次第でございます。本年も引き続き、こうして比叡山時報に執筆させていただけますことは、ありがたくもまた、勿体ないことと、光栄至極に存じております。

今回は根本伝教大師最澄様の「御遺誡」について書くよう仰せを賜りましたが、お大師様の高邁、且つ、深淵なご精神が不肖の身に理解できようう筈もなく、忸怩たる思いでいっぱいですが、たとえ山頂に到達することが出来ないとしても、容易く登頂を諦めてしまっては、それこそお釈迦様がきつく戒められた不精進となってしまいます。少しでも近づこうとする努力が何よりも大切と己を励まし、最澄様の遺された言葉に想いを馳せてみることにいたします。

伝教大師の御霊をお祀りする浄土院伝教大師廟

『傳述一心戒文』を撰じた別当大師光定和尚

数ある御遺言ではありますが、その中から、

「爲我勿作佛　爲我勿寫經　述我之志」

「道心之中有衣食也　衣食之中无道心也」

二つの句を取り上げてみたいと思います。

最澄様は真の仏教者

まず、私の為に造仏や写経をしてはならないとは、まるでイスラム教のクルアーンの一節に登場するかの如き警句です。これが仏教を信奉する者、ましてや一宗のトップの口から放たれた言葉なのかと驚く方もいらっしゃると思われますが、これこそ、真の仏教者、特に釈尊の教えを根本とする天台宗の宗祖からこそ出てこなければならない言葉であります。死期を悟ったガウタマ・シッダールタは、師匠亡き後は何を頼りとして生きて行けばいいのかという弟子たちの質問に対して、自己自身を拠り所とし、釈尊自らが説き明かした法を頼りとせよと訓戒を遺されました。これが、有名な〈自燈明・法燈明〉の教えです。そして、寂しいからといって、くれぐれも自分の偶像などを造って礼拝してはならないとも戒められました。この点で、現在日本に伝わる仏教とは大きな隔たりがありますが、これが本来のお釈迦様の教えなのです。

市川猿之助氏が演じる「連獅子」　齋藤芳弘氏撮影

「自らの志を述べよ」とは

これを歌舞伎俳優の立場で解釈すれば、「型にとらわれてはならない」ということになりましょう。われわれが演じる古典作品には、先人たちが工夫を重ねてきた「型」というものがあります。この伝えられた型を学ぶのが修行です。しかしながら、型をただなぞっただけでは、仏作って魂入れずで、そこに心を込めなければなりません。泣く演技の場合、手で目元を覆って泣き声を上げれば、それで観客に悲しみが伝わるかというと、そうではありません。何よりも大切なのは、悲しんでいる気持ちなのです。

明王堂では日々、大行満大阿闍梨様による護摩行が修されています。行者は手に印を結び、口に真言を唱えて修法を行いますが、一見複雑で難解なその所作にも、それぞれ、仏様をお迎えして、おもてなしをするという意味が込められています。動作と言葉に、心が加わって、初めて身・口・意の三密となるのです。随喜する私たちも、護摩木に願い事を書いて、阿闍梨様のお加持を頂戴しさえすれば、即座に願いが叶うというのではありません。例えば身体健康を願うなら、健康でいたいという気持ちを強く持った上で、不摂生を慎む行動を取る。坐して待っているだけでは、何も生まれないのです。叡山で千古の昔から現代に至るまで、千日回峰行などに代表される厳しい行が変わらず重んぜられる所以は、ここにあります。仏道とはまさに、自らの身をもって歩む道なのです。自らの志を述べるとは、以上のようなことを伝えようとしているのではないでしょうか。

道心の中に衣食有り

次の句は、仏の道を求める中に生活の糧があって、生活の糧を得るために仏道を行じるのではない。このように解釈してみましたが、いかがでしょう。幼少期から歌舞伎を生業としている私にとっては、劇場空間に身を置く事が非日常ではなく、ごく身近な日常として存在しています。もちろん、良い意味での緊張感はありますが、仕事という感覚は非常に希薄であります。日々の糧の対価として仕事を捉えているのではなく、ただただ好きなことに没頭した結果、生活をさせていただいている。これが正直な想いです。実にありがたいことと感謝するばかりです。

人はパンのみに生きるにはあらず。好きこそ物の上手なれ。昔の人は良く言ったものです。「自分の生業を心から愛する。それが俳優ならば舞台をとことん愛する。僧侶ならば、神仏をとことん愛する。その上で精進を重ねてゆけば、殊更に心配をしなくとも、衣食はちゃんと後からついてくるものだよ。好きだという感情が精神の根本にないといけないんだよ」

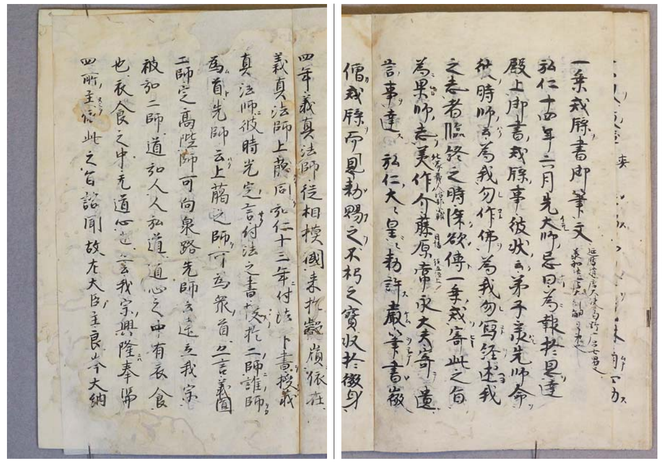
最澄様はそのように説かれておられるような気がいたします。

「物で栄えて、心で滅びる」

現代文明は飛躍的な進歩を遂げた代わりに、とかく目先の形だけに囚われ、肝腎の心や精神を忘れがちな、否、忘れさせようとする傾向にあると言えば、少々言い過ぎでしょうか。「物で栄えて、心で滅びる」とは、薬師寺伽藍復興に生涯を捧げられた高田好胤師の警鐘の言葉ですが、人類は未曾有の恩恵と引き換えに、大切な何かを犠牲にしてしまっているのではと、強く思わずにはいられない今日この頃です。

市川猿之助
（いちかわえんのすけ）

2012年６月、市川亀治郎を改め四代目市川猿之助を襲名。第59回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。「猿之助四十八撰」を中心にスーパー歌舞伎を新たに展開する。現在歌舞伎以外にもＴＶドラマやCM、バラエティーでも活躍中



『傳述一心戒文』（延暦寺蔵）写真右中巻「爲我勿作佛　爲我勿寫經　述我之志」左下巻「道心之中有衣食也　衣食之中無道心也」

「爲我勿作佛　爲我勿寫經　述我之志」

「道心之中有衣食也　衣食之中无道心也」

坐して待っているだけでは、何も生まれない